

### **(3) 成人期診療科**

#### **はじめに**

2002年3月、“成育医療”を担うべく施設として国立成育医療センターが開設され、約1年が経過した。成育医療は新しい概念の医療体系であり、その内容、運用に関しては未だ確立されたわけではなく、この1年間は初期形成期に位置付けられると思われる。

その中で、総合診療部 - 成人期診療科は梅田啓医師、北洞哲治医師で担当され、診療が行なわれてきた。特に成人期診療科は、診療内容が多岐にわたると考えられるが、その診療内容の規定は難しく、有用な機能を模索する中でこの1年が経過したととらえるのが実感である。

以下、初年度の診療内容をふりかえるとともに、問題点、今後の展望についてまとめてみた。

#### **成人期診療科の診療**

総合診療部は、小児期診療科、思春期診療科、成人期診療科の年齢に応じた診療科より構成され、患者を疾患単位で診るのではなく、人として総合的、包括的さらに継続的に診療を行なっていくことを基本とすると位置付けられている。

その中で、成人期診療科は成人期に達した小児期発病の“いわゆるキャリアオーバー”疾患を有する患者への対応を初期の主目的として診療を開始した。この1年間をかえりみると成人期診療科で診る患者は未だ少なく、成人期に達した患者であっても専門診療科で継続して診療可能な症例の多くは専門診療科での治療継続となっていた。

成人期診療科に依頼のあった患者の多くは、成人期に達し、なおかつ専門診療科での一専門領域のみでは対応困難な症例、あるいは成人期特有の問題を抱え小児期診療で対応出来ない症例であり、これらの診療内容が成人期診療科の果たすべき一つの姿と認識出来た。

一方、他施設からの患者紹介については、成育医療の成人期診療科を理解された上での紹介患者は本年度では皆無であった。

#### **成人期診療科の展望**

##### **(a) キャリアオーバー医療**

前述したごとく総合診療部 - 成人期診療科の役割の一つは、成人期に達したキャリアオーバー疾患を有する患者の診療にある。しかしながら多くの患者は従来の専門診療科での治療の継続で対応

可能であり、年齢のみで診療科を変えることは、必ずしも良い結果を生むものではない。むしろ医師と患者の信頼関係が優先されるべきと考えられる。ここで一つの問題は、どのような患者に成人期診療科が関わっていくかの点にある。キャリアオーバー疾患に対する診療体制は現在大きな問題を抱えており、問題の整理が必要である。キャリアオーバー疾患の成人期患者をどのような診療体系でみてゆくのがよいのか検討がすすめられているが、この1年間の診療経験よりみると、基本的には小児期より診てきた主治医が可能な限り診療に携わるのが良いと考えられる。しかしながら、多臓器にわたる複雑な病態を持つ患者、また成人特有の生活あるいは心の悩みを持つ患者は、小児領域のみの診療では解決出来ない問題があり、成人期診療の視点が要求されることが多い。このような患者への関わりが大切と考えられるが、受け渡しの診療ではなく成人期診療が付加された診療と理解することが治療効果を向上させると思われる。開設一年目は、診療システムが理解された上で運用されることが少なかったと思われ、二年目に向けて、その理解と充実を計り、他施設よりの紹介を含め、今後増加すると予測されるキャリアオーバー疾患の意義ある治療体系となるよう努力が求められると考えられる。

## **(b) 成育医療**

総合診療部での診療は周産期 - 小児期 - 成人期をサイクルとして連続的かつ一貫した診療体系を基盤としてなされる。特に胎生期、小児期の慢性疾患には、原疾患の継続的治療のみならず種々の合併症あるいは成長に伴う社会的心身ケア、さらには子作りにまで及ぶ多面的医療環境が要求され、総合診療部はこれらチーム医療を患者背景に合わせて統合する役割が期待される。

上記を総合診療部の基本概念の一つととらえると、成人期診療科の診療範囲は、いわゆるキャリアオーバー疾患に留まらず、小児期を含めた若年発病の慢性難治性疾患が対象疾患となると同時に、この診療内容は母性内科にオーバーラップするものである。リプロダクション年齢の慢性難治性疾患患者は母性のみならず父性を含め、妊娠、出産、子育てに種々の悩みを持つことが多く、医療機関の対応も決して満足できる現状には残念ながらない。成育医療の果たすべき役割は、この視点より考えることが重要であり、母性内科の内容をより幅広く捉え、成人期診療科と一体となり、母性・父性医療の確立が目指されるところである。

母性・父性医療の実践はまだ十分にはなされていないが、今後、専門外来の開設などにより、その診療内容を明確化し、診療の実を上げていくことが、成育医療の一つの定着につながるものと思われ、来年度には実現していきたいものである。

## **成人期診療科の教育・研究**

### **(a)教育**

総合診療部の教育は二つの役割が求められる。第一は胎生期から成人期まで点ではなく線をもって多領域にわたる初期治療に対応出来る医師を養成するジュニア・レジデント教育である。そのためには各専門領域を含めた患者を担当し、各専門医師協力のもとでの教育が望まれる。第二は新しい概念である成育医療総合診療の専門医の確立であり、診療の項で述べた内容を担い実践、普及すべき医師養成のシニア・レジデント教育である。

しかしながら、初年度は小児医療総合診療に教育が集中し、本来の成育医療の視点での教育体制には到らなかった。成育医療の定着、普及には成人期診療科を含めた教育が必要であり、これからの課題としたい

### **(b)研究**

初年度は、成人期診療科として成育医療における具体的成果はあげられなかったが、小児期 - 成人期 - 周産期をサイクルとした新しい領域の臨床疫学をはじめとする臨床研究の集積が診療の実績とともに成育医療で重視されると考えている。